

文化力と軍事力

かけがえなきものを守る技術開発

東京大学大学院情報学環教授

池内 克史



昭和24年5月生まれ。工学博士。昭和53年、東大(院)博士課程(情報工学)修了後、MIT人工知能研究所(3年)、工技院電総研(現産総研)(5年)、カーネギーメロン大学計算機科学部(10年)を経て、平成8年より現職。

IR T (Information & Robotics Technology)

を利用した文化遺産保存のための技術開発を行っている。有形文化財を効果的にデジタルコンテンツ化するセンサー群の開発やテラバイトに上るデータの効率的な処理、転送・表示ソフトウェアの開発がメインの課題である。無形文化財保存のためにヒューマノイドロボットに踊りを学習させるといった研究も行っている。これと平行して、これらの研究結果を利用して、鎌倉や奈良の大仏、カンボジアアンコール遺跡内のバイヨン寺院といった大型有形文化財の3Dデジタル化も行ってきた。これらの3Dデジタルデータは、不幸にして文化遺産が失われた際の再現や保存修復の基礎資料となる。我々の大仏のデータが数々の番組のなかで古来の姿を再現するCG映像に使用されたように、教育や娯楽さらにはPRなどためのデジタルコンテンツの基礎資料ともなる。

筆者は、東大に移る前、アメリカの大学に10数年籍を置いた。というか本年度でやっと日本で働いた期間がアメリカのそれを越えた。この間、アメリカの大学における軍事研究が先端技術開発を引っ張っている

状況を垣間見た。

軍事研究においては、コストを無視して、最高水準の技術開発を行うことが求められる。さらに、開発時には全く予測しなかったような新規分野が派生することでも知られる。例えば、現在のカーナビやインターネットなどは軍事技術を出発点とする民生技術の好例である。

日本の大学は、軍事研究を自粛している。さらに最近、大学の研究者は、コストを意識しつつ研究を進めるべきであるとの意見も聞かれる。コストを意識する技術開発はともすれば近視眼的で、漸近的になりやすい。日本の民間企業の得意分野でもあり、民間企業にまかせれば良い。大学研究者は、コストを無視する分野に注目するべきではないか。

軍事研究は、「祖国」というかけがえなきものを守るのだから、コストを無視できるとされる。「かけがえなき「祖国」を守る軍事技術」という概念の中で重要なのは、実は、祖国にあるのではなく、「かけがえなきX」にあるという点に注目したい。Xとして、人命や宇宙船地球号が理解しやすい。このXの中に、文化があることを指摘し

たい。昔ユダヤの民は、軍事力の差で国を失った。軍事力で敗れて消えて行った民族は多い。しかし、ユダヤの民は、二〇〇〇年間、民族のアイデンティティすなわち文化力を保持し続け、二〇世紀に入り、イスラエルを建国した。ある意味、軍事力と文化力は民族自立の両輪なのかも知れない。ハード的な軍事力とソフト的な文化力の両輪がなければ民族としての威厳はない。

この文化力の重要な部分がその民族が保有する文化遺産と文化発信能力に依存すること、かけがえなき日本の文化、日本の文化力が守れる。これと同時に、最先端のコストを無視した新規分野の開拓もなされる。軍事技術を輸出する国はある意味「死の商人」と揶揄される可能性がある。文化技術の輸出に何の後ろめたさもない。軍事情力向上の研究はアメリカの大学にまかせ、日本の大学は文化力向上のための研究開発を行うのではないか。文化力向上のための文化遺産を守るIR T開発に尽くしたいと考えている。

次号は、はこだて未来大学学長、中島秀之氏にお願いします。



敬称略) 小長啓一→野々内 隆→根来泰周→石弘光→武藤敏郎→高橋温→増田寛也→西澤潤一→内田盛也→中原恒雄→今井敬→室伏稔→上島重二→西室泰三→依田巽→重延浩→吉村作治→中川武→池内克史

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧頂けます。